

平成 21 年度理事会, 評議員会ならびに総会における報告承認決定事項

第 52 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会は, 柏木厚典会長主宰のもとに 2009(平成 21)年 5 月 21, 22, 23, 24 日の 4 日間, 大阪国際会議場他において開催された。これに先立つ理事会, 評議員会は 5 月 20 日リーガロイヤルホテル(大阪)にて, また総会は 5 月 21 日大阪国際会議場メインホールにて開催された。

1. 第 52 回社団法人日本糖尿病学会年次学術集会の経過報告 (柏木会長)

2009 年 5 月 21 日午後から 24 日午前にわたり第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会を大阪国際会議場, リーガロイヤルホテル大阪, ホテル NCB にて開催させていただきました。ご承知のごとく, 5 月 15 日より兵庫県・大阪府において新型インフルエンザ(H1N1)患者が発生し拡大いたしました。この新型インフルエンザの問題に関して極めて深刻に受け止め, 事態の推移を慎重に検討し, 門脇孝理事長ともご相談の上, 市民講座は中止いたしました。学術集会は開催させていただきました。本学会の参加者は約 6,750 名(有料参加者 6,146 名, 国外招待者 48 名, 国内招待者 23 名, 学生 427 名, 研修医 60 名など)であり, 一般演題 1,829 題中 220 題あまりの演題取り消しがあり, また急遽座長などをお願いすることがありましたが, 多くの先生方大変なご尽力にて例年同様の活発な年次学術集会となりました。

今回は「ポストゲノム時代に進化する糖尿病臨床」をメインテーマに, ゲノム情報をどのように日常臨床に取り入れるかをめざしました。会長講演, 受賞講演の後, 特別講演 5 題, Featured Symposium 5 テーマ, 12 のシンポジウム, 日本循環器学会, 日本腎臓学会, 日本脳卒中学会, 日本歯周病学会とのジョイントシンポジウム, 4 つのワークショップ, 2 つのコントラバーシー, Late-Breaking Clinical Trial, Case Study 2 テーマ, 糖尿病劇場, Meet the Expert 4 テーマ, 教育講演 18 題など盛りだくさんな内容ではありましたが, 参加者数の減少にもかかわらず会場は熱気にあふれ, 盛況でありました。今回, 新しく計画いたしましたプレジデントポスターセッションは狭い会場でしたが, 大変多くの先生方に集まって頂き, 熱心にご討議いただきました。更に, Asian Association for the Study of Diabetes の第 1 回学術集会が共同開催され, アジアから多くの先生方のご参加をいただきました。大変熱心な討議がなされ, アジアの糖尿病の予防, 治療の現状と問題点がクローズアップされ, 共通の認識

が生まれましたことは大変意義深いものでありました。参加された海外の先生方から感謝のメールを多数いただき, 関係された多くの先生方のご努力に対しまして心より御礼申し上げます。

いずれにしても多くの会員の方々の参加が不可能となったこと, また参加していただいた殆どの先生がマスクをして, 熱心にご討議いただきましたことなど, 学会史上初めてのことであり, 異常な状態での開催になりました。多くのご不便と, ご不満をおかけしたことをあらためてお詫び申し上げまして, 第 52 回日本糖尿病学会年次学術集会終了のご報告と御礼の挨拶とさせていただきます。

2. 平成 20 年度事業報告および庶務報告(河盛理事)

●事業報告

1) 第 51 回年次学術集会

会 長 門脇 孝(東京大学大学院医学系研究科)

会 期 平成 20 年 5 月 22・23・24 日(木・金・土)

会 場 東京国際フォーラム, 他

参加者 11,623 名

○会長講演 2 型糖尿病の成因を追い求める旅—真理への希求

○特別講演 内科医 60 余年—糖尿病学を学ぶ 特に 2 型糖尿病診療のあゆみについて

○特別講演 Transcriptional Basis of Energy Homeostasis in Health and Disease

○特別講演 iPS 細胞の展望と課題

○学会賞受賞講演

ハーゲドーン賞 2 型糖尿病の統合的理解に向けた分子機構の解析

リリー賞 ①遺伝子改変マウス作製による 2 型糖尿病の分子メカニズムの解明

②糖尿病および糖尿病合併症の新規発症機構の解明—ミトコンドリア由来活性酸素の関与—

○特別シンポジウム

1. The Need for Coordinated Global Responses to the Diabetes Epidemic 他 21 題

○シンポジウム

1. The Role of Incretin Hormones in Type 2 Diabetes 他 114 題

○ワークショップ

1. HbA_{1c} 測定法の現状と問題点 他 4 題

○教育講演

1. 1 型糖尿病の病態と成因 他 13 題

○市民公開講座

テーマ:「あなたの血管を糖尿病から守る～楽しく続ける糖尿病対策～」

○口演発表 702 題

○ポスター 1,338 題(内, プレジデントポスター 279 題)

2) 出版事業

①会誌「糖尿病」第 51 巻 4 号, サプリメント 1(抄録集)～第 52 巻 3 号を発行

②糖尿病患者向け指導書

- i 糖尿病食事療法のための食品交換表 第 6 版 200,000 部発行
- ii 糖尿病治療の手びき 改訂第 54 版 30,000 部発行
- iii 糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版 10,000 部発行
- iv 糖尿病食事療法のための食品交換表 CD-ROM 版(ver. 3) 1,000 部発行
- v 糖尿病性腎症の食品交換表 CD-ROM 版(ver. 2)付き 増刷なし
- vi Food Exchange List 増刷なし
- vii 糖尿病食事療法のための食品交換表 活用編 10,000 部発行

③医師, コ・メディカル向け指導書

- i こどもの糖尿病・サマーキャンプの手引き 第 3 版 増刷なし
- ii 糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版増刷なし
- iii 糖尿病療養指導の手びき 改訂第 3 版増刷なし
- iv 糖尿病治療ガイド 2008-2009 40,000 部発行
- v 糖尿病学用語集 第 2 版 増刷なし
- vi 糖尿病遺伝子診断ガイド 第 2 版 増刷なし
- vii 糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂第 3 版 700 部発行
- viii 小児・思春期糖尿病管理の手びき 改訂第 2 版 増刷なし
- ix 糖尿病学の進歩 42 集 1,200 部発行
- x 糖尿病の療養指導 2008 1,200 部発行

xi 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン 改訂第 2 版 2,000 部発行

xii Treatment Guide for Diabetes 2007 増刷なし

3) 第 43 回「糖尿病学の進歩」

世話人 相澤 徹(信州大学医学部医学教育センター)

会 期 平成 21 年 2 月 20・21 日(金・土)

会 場 長野県松本文化会館, 他(松本市)

参加者 3,003 名

①第 1 日目

A 会場

○レクチャー: 糖尿病療養指導に必要な知識 1

1. 糖尿病の概念 他 5 題

○レクチャー: 糖尿病療養指導に必要な知識 2

1. 血糖管理の意義 他 5 題

B 会場

○レクチャー: 1 型糖尿病診療の update

1. 1 型糖尿病の成因 他 5 題

○レクチャー: 2 型糖尿病診療の update

1. 成因: インスリン分泌と抵抗性 他 5 題

C 会場

○シンポジウム: CDE の現状と将来展望

1. 日本糖尿病療養指導士(CDEJ)の歩み 他 4 題

○CDE セッション: 糖尿病予防と療養指導～個から連携に向けた CDE のチャレンジ～

1. 大学病院での CDE 外来 他 4 題

F 会場

○シンポジウム: 糖尿病研究の将来展望

1. Metabolic Information Highway—中枢と末梢をつなぐ自律神経系による代謝情報ネットワーク 他 4 題

○レクチャー: β 細胞研究の最前線

1. インスリン分泌とイオンチャネル 他 5 題

G 会場

○レクチャー: 診断と治療の新たな展開

1. 肥満外科治療—肥満症治療における位置づけと内科との連携— 他 5 題

○レクチャー: インスリン作用研究の最前線

1. 肝臓の糖・脂質代謝における IRS-1, IRS-2 の機能的な役割分担 他 5 題

②第 2 日目

A 会場

○レクチャー: 糖尿病療養指導に必要な知識 3

1. 糖尿病患者の死因 他 5 題

○シンポジウム：糖尿病対策

1. 世界の糖尿病の現状(IDF の立場から)
他 4 題

B 会場

○レクチャー：細小血管症の臨床

1. 細小血管障害の臨床 疫学研究から学ぶこと
他 5 題

○レクチャー：大血管症の臨床

1. 舟形研究(Funagata study)―耐糖能障害と大血管障害との関連―
他 5 題

C 会場

○症例検討

1. 意識消失発作を伴う低血糖を来した 1 例
他 1 題

○シンポジウム：糖尿病患者の心理

1. 糖尿病患者を支える心理的アプローチ
他 4 題

F 会場

○レクチャー：糖尿病と遺伝子

1. MODY
他 3 題

○レクチャー：合併症の分子基盤

1. 網膜症
他 3 題

G 会場

○シンポジウム：人工臓器の現状と未来

1. ベッドサイド型人工膵臓開発の歴史
他 4 題

4) 地方会活動

1. 第 42 回日本糖尿病学会北海道地方会
会 期 平成 20 年 11 月 16 日(日)
会 場 札幌プリンスホテル 国際館パミール
会 長 島本和明(札幌医科大学第二内科)
参加者 575 名
2. 第 46 回日本糖尿病学会東北地方会
会 期 平成 20 年 11 月 1 日(土)
会 場 仙台国際センター
会 長 岡 芳知(東北大学大学院医学系研究科
分子代謝病態学分野)
参加者 681 名
3. 第 46 回日本糖尿病学会関東甲信越地方会
会 期 平成 21 年 1 月 24 日(土)
会 場 パシフィコ横浜
会 長 藤田芳邦(北里大学医学部内分泌代謝内
科学)
参加者 1,547 名
4. 第 78 回日本糖尿病学会中部地方会
会 期 平成 20 年 10 月 25 日(土)
会 場 福井市地域交流プラザ(AOSSA)

会 長 宮森 勇(福井大学医学部第三内科)

参加者 296 名

5. 第 45 回日本糖尿病学会近畿地方会

会 期 平成 20 年 11 月 22 日(土)

会 場 神戸国際会議場, 神戸ポートピアホテル, 兵庫医療大学

会 長 難波光義(兵庫医科大学内科学糖尿病
科)

参加者 2,012 名

6. 第 46 回日本糖尿病学会中国・四国地方会

会 期 平成 20 年 11 月 14・15 日(金・土)

会 場 宇部全日空ホテル

会 長 谷澤幸生(山口大学大学院医学系研究科
病態制御内科学(第 3 内科))

参加者 650 名

7. 第 46 回日本糖尿病学会九州地方会

会 期 平成 20 年 10 月 10・11 日(金・土)

会 場 (財)久留米市文化振興会 石橋文化セ
ンター

会 長 山田研太郎(久留米大学医学部内分泌代
謝内科)

参加者 1,421 名

5) 分科会活動

第 23 回日本糖尿病合併症学会

会 期 平成 20 年 10 月 3・4 日(金・土)

会 場 日本都市センター

会 長 岩本安彦(東京女子医科大学糖尿病セ
ンター)

参加者 674 名

6) 糖尿病週間

平成 20 年 11 月 10 日～16 日, 第 44 回全国糖尿病
週間の行事が一斉に行なわれた。テーマは「広げよ
う! ブルーサークル」。

7) 国際糖尿病連合会議

・ IDF-WPR Executive Meeting(2009.3.5, 台北)へ
の出席

・ IDF-WPR Council Meeting(2009.3.6-7, 台北)へ
の出席

・ Executive Board Meeting of IDF(2008.5.3-4, コ
ペンハーゲン)への出席

・ 第 1 回 Diabetes in Asia Study Group Conference
(2008.10.16-18, カトマンズ)への出席

8) 普及・啓発・後援事業

①第 44 回全国糖尿病週間の共催

- 期 間 平成 20 年 11 月 10 日(月)～16 日(日)
- ②日本糖尿病協会への協力
「さかえ」および「つぼみ」発行の企画等
 - ③世界糖尿病デーへの参加
第 2 回「世界糖尿病デー」関連イベントの開催
平成 20 年 11 月 14 日
 - ④日本糖尿病学会 50 周年記念フォーラム in
TOYAMA
平成 20 年 4 月 16 日
 - ⑤第 8 回日中友好糖尿病シンポジウム
平成 20 年 4 月 25 日～26 日
 - ⑥糖尿病の予防と治療を目指してーグリコヘモグ
ロビン(HbA1c)認知向上運動ー
平成 20 年 5 月 1 日～平成 20 年 12 月 31 日
 - ⑦ 2008 年歯の健康シンポジウム
平成 20 年 5 月 10 日
 - ⑧ 2008 年度全腎協全国大会 in 富山
平成 20 年 5 月 25 日
 - ⑨第 51 回日本腎臓学会学術総会シンポジウム 3
(共催)
「糖尿病性腎症の成因と治療」
平成 20 年 5 月 31 日
 - ⑩糖尿病重症化予防(フットケア)研修会
平成 20 年 6 月 7 日・8 日, 7 月 12 日・13 日
 - ⑪世界口腔保健学術大会記念「第 14 回口腔保健シ
ンポジウム」
平成 20 年 7 月 5 日
 - ⑫第 11 回糖尿病地域医療研究会総会
平成 20 年 7 月 26 日
 - ⑬第 25 回糖尿病 Up・Date 賢島セミナー
平成 20 年 8 月 23 日～24 日
 - ⑭第 33 回 腎不全対策を語るつどい
平成 20 年 9 月 14 日
 - ⑮「なくそう 減らそう 糖尿病」キャンペーン
公開 シンポジウム
平成 20 年 10 月 12 日
 - ⑯第 6 回 1 型糖尿病研究会
平成 20 年 10 月 18・19 日
 - ⑰情報計算化学生物学会(CBI 学会)2008 年大会
(協賛)
平成 20 年 10 月 22 日・24 日
 - ⑱第二回国際シンポジウム「コメと疾病予防」
The Second International Symposium on "Rice
and Disease Prevention"
平成 20 年 10 月 26 日・27 日
 - ⑲東京新聞フォーラム「(仮)糖尿病について学ぶ」
(共催)
平成 20 年 10 月 27 日

- ⑳糖尿病シンポジウム
平成 20 年 11 月 16 日, 11 月 22 日, 11 月 24
日, 平成 21 年 3 月 8 日
- ㉑治療中断を防ぐ研究(J-DOIT2)研究発表会
平成 20 年 11 月 22 日
- ㉒第 28 回医療情報学連合大会(第 9 回日本医療情
報学会学術大会)
平成 20 年 11 月 23 日～25 日
- ㉓平成 20 年度「食育健康サミット」
平成 20 年 11 月 27 日
- ㉔糖尿病予防キャンペーン
平成 20 年 11 月 30 日, 12 月 7 日
- ㉕第 8 回先進インスリン療法研究会
平成 20 年 12 月 6 日
- ㉖第 20 回日本糖尿病性腎症研究会
平成 20 年 12 月 6 日・7 日
- ㉗第 20 回分子糖尿病学シンポジウム
平成 20 年 12 月 13 日
- ㉘なくそう減らそう歯周病シンポジウム
平成 20 年 12 月 13 日
- ㉙第 34 回 腎不全対策を語るつどい
平成 21 年 1 月 25 日
- ㉚肥満・糖尿病と栄養と口腔保健 教育セミナー
平成 21 年 1 月 31 日
- ㉛糖尿病の検出及び発症予防」事業
通年

●庶務報告

1) 総会

平成 20 年 5 月 22 日, 東京国際フォーラムにて第 51 回通常総会を開催した。平成 19 年度事業報告, 庶務報告, 収支決算報告が承認され, また平成 20 年度事業計画追加および補正予算ならびに平成 21 年度事業計画および予算が承認された。第 54 回会長に羽田勝計学術評議員が選出・承認された。

2) 評議員会および学術評議員会

平成 20 年 5 月 21 日にそれぞれ開催された。

3) 理事会

定例理事会は平成 20 年 5 月 21 日, 11 月 30 日, 臨時理事会は平成 20 年 5 月 23 日, 10 月 4 日, 平成 20 年 2 月 19 日の合計 5 回開催された。

●会員状況報告(平成 21 年 3 月 31 日現在)

1. 役員等

1) 役員

理 事 19 名(19 年度末 18 名, 1 名増)

監 事 2 名(19 年度末 2 名)

2) 学術評議員 610 名(19 年度末 610 名, 2 名追

加, 物故者 2 名)

3) 評議員 88 名(19 年度末 88 名)

2. 会員等

1) 名誉会員 27 名(19 年度末 27 名)

2) 正会員

20 年 3 月末日会員数 15,767 名

20 年度新入会 713 名

退会 -456 名 退会内訳:
希望退会 339 名
会費未納 91 名
物故者 26 名

正会員 現在数 16,024 名(257 名増)

3) 賛助会員

20 年 3 月末日会員数 41 名

賛助会員 現在数 41 名

3. 物故会員

功労学術評議員 猪尾和弘 入交昭一郎 黒沢駿光
高岡善人 水島 裕 吉沢国雄
学術評議員 榊田典治 田野保雄
正会員 安宅清志 大久保隆生 大野善市
金田秀樹 佐藤 利 砂川伊弘
妹尾泰利 高橋 和 高橋洋司
対馬 哲 寺西慶郎 富 俊明
中山良子 深町浩士 丸山雄一郎
三木國典 三木裕子 山本敏雄
(敬称略, 連絡のあった方のみ)

3. 委員会報告

1)「糖尿病」編集委員会 委員長 横野浩一

①委員会の開催: 6 回(平成 20 年 5 月 23 日, 8 月 3 日, 9 月 23 日, 11 月 16 日, 平成 21 年 2 月 1 日, 4

	総頁数	原著	症例	ミニレビュー	報告	受賞講演	地方会記録	委員会報告	編集者への手紙	会報	特集
Vol. 51 No. 4	82	2 1	5				1		1		1
Supplement 1	556	第 51 回年次学術集会抄録号									
No. 5	88	4 1	3								1
No. 6	128	2	4	1			1	1			1
No. 7	172	3 1	6				1			1	
No. 8	56	1 1	5				1				
No. 9	74	1 2	4							1	
No. 10	60	1 1	6					1			
No. 11	102	1 2	5			1	1				
No. 12	86	1 1	9								
Vol. 52 No. 1	84	3	6		1		1			1	
No. 2	112	4 1	1		1		1				
No. 3	70	3	7					1			
合計	1,670	26 11	61 0	1 —	1 1	1 —	7 —	3 —	1 —	3 —	3 —

月 5 日)

②出版状況：第 51 巻 4 号から第 52 巻 3 号までの 12 誌と Supplement 1「第 51 回年次学術集会抄録号」を発行。詳細は前頁表の通り(下段：コメディカルコーナー)。

③論文受付状況

平成 20 年 4 月 1 日から平成 21 年 3 月 31 日に新規投稿受付した論文数は 139 編。

この間に採否決定した論文数 122 編，採択可論文数 93 編，否論文数 29 編。

採択率は 76%。辞退した論文数 9 編。採択日から掲載までの期間は 2～3 カ月。

④主たる審議・検討事項

- (1)投稿論文増加のための投稿規定の一部改定
- (2)推敲期間を超過した論文への再投稿通知の徹底
- (3)編集委員による「特集」の企画とその早期掲載
- (4)医学書院「糖尿病ハンドブック第 2 版」における訴訟に関して
- (5)「糖尿病」誌の出版社に関わる委託契約の見直しについて

2)「食品交換表」編集委員会 委員長 石田 均

(1)食品交換表編集委員会を平成 20 年 4 月 12 日(日)，5 月 24 日(木)，10 月 5 日(日)，ならびに平成 21 年 2 月 8 日(日)の 4 回開催した。

(2)医学書院「糖尿病ハンドブック 第 2 版」の訴訟について

平成 20 年 6 月 18 日の第 14 回弁論準備手続きにおいて和解が成立した。平成 18 年 5 月の提訴から約 2 年を要した，今回の食品交換表の著作権侵害に関する訴訟の経緯について，本委員会として報告書を作成し，速やかに学会機関誌「糖尿病」と会員向けホームページに掲載していただくことを理事会に依頼した。

(3)出版事業について[平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日，()は発行以来の累計部数]

出版事業は順調で，食品交換表の累計出版部数は 230 万部に上った。

○食品交換表 第 6 版

売上部数：200,650 部(2,225,385)，発行部数：200,000 部(2,300,000)

なお，平成 21 年 4 月下旬に第 24 刷 100,000 部発行の予定

○糖尿病性腎症の食品交換表 第 2 版

売上部数：8,436 部(77,219)，発行部数：10,000 部(83,000)

○糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版

売上部数：1,513 部(14,608)，発行部数：増刷な

し(16,000)

なお，平成 21 年 4 月上旬に第 6 刷 3,000 部発行の予定

○食品交換表の英訳版

売上部数：92 部(2,074)，発行部数：増刷なし(2,500)

○CD-ROM 版食品交換表(ver. 3)

売上部数：957 部(6,868)，発行部数：1,000 部(7,500)

○CD-ROM 版(ver. 2)付糖尿病性腎症の食品交換表

売上部数：267 部(1,764)，発行部数：増刷なし(2,000)

○食品交換表 活用編

売上部数：11,270 部(34,843)，発行部数：10,000 部(40,000)

(4)引用許可願(平成 20 年 4 月 1 日～平成 21 年 3 月 31 日)

○食品交換表 第 6 版：申請 31 件

無条件許可 12 件，条件付き許可 16 件，不許可 1 件，取り下げ 2 件。

○糖尿病食事療法指導のてびき 第 2 版：申請 1 件，条件付許可 1 件。

3)「治療の手びき」編集委員会 委員長 西沢良記

●本委員会では，患者用書籍『糖尿病治療の手びき(改訂 54 版)』(2006 年 2 月発行，南江堂)および指導者(医師・コメディカル)用書籍『糖尿病療養指導の手びき(改訂第 3 版)』(2007 年 5 月発行，南江堂)の編集実務を行っている。

●昨年度は 2008 年 5 月 23 日(第 51 回日本糖尿病学会総会会期中)に委員会を開催し，これまで課題としていた，『糖尿病治療の手びき(改訂第 54 版)』への「メタボリックシンドローム」の記載追加について，その内容の最終確認を行った。その後，第 3 刷(2009 年 2 月発行)で書籍への記載追加を行った。

●『糖尿病治療の手びき(改訂第 54 版)』の 2009 年 1 月時点の売上は約 12 万部の売行きである。また，『糖尿病療養指導の手びき(改訂第 3 版)』の同時点での売上は約 2500 部で，現在第 2 刷の準備中である。

●『糖尿病治療の手びき』および『糖尿病療養指導の手びき』は今後，①診断基準の見直し，②糖尿病診療ガイドラインの改訂，③インクレチン療法の導入，等を鑑みて 2010 年より改訂に取り組む予定である。

4)小児糖尿病委員会 委員長 雨宮 伸

①「小児思春期糖尿病コンセンサスガイドライン」発行について

ISPAD(国際小児思春期糖尿病学会)から「小児思春期糖尿病コンセンサスガイドライン」が2006年から2008年にかけて全18章が発表された。このガイドラインはエビデンスに基づいた記載であり、本委員会編集書籍『小児・思春期糖尿病管理の手びき』をベースにこれらの内容を盛り込み、各章にステートメントを付して「小児・思春期糖尿病診療コンセンサス・ガイドライン」として、日本糖尿病学会小児糖尿病委員会と日本小児内分泌学会糖尿病委員会が合同して改訂することが理事会で正式に承認された。

執筆者については、日本糖尿病学会小児糖尿病学会の小児科医と日本小児内分泌学会糖尿病委員会の小児科医(日本糖尿病学会の会員)が担当とする。査読者については、日本糖尿病学会小児糖尿病委員会の内科医と各領域の専門の内科医に依頼することを基本方針として確認した。

②2011年のISPADサイエンススクールについて

2011年のISPADサイエンススクールは日本で開催予定であり、担当責任者は浦上委員である。今後、日本糖尿病学会の国際交流委員会の中にISPAD部会が構成される予定となっており、日本糖尿病学会からのサポートも日本小児内分泌学会と共に要請する。

③小児科医の糖尿病専門医取得について

小児科医が糖尿病専門医を取得できる施設は限られており、学会参加に消極的な要因ともなっている。専門医取得の改善が検討されているので、当委員会でも各地方会を通して体制変更について積極的に支援していく。

④IDFの“Access to Essential Diabetes Medicines for Children in the Developing World”に関するワークショップが2009年10月にロンドンで開かれ、田嶋理事と浦上委員が出席した。

5)日本糖尿病協会委員会 委員長 佐々木 敬

平成20年8月9日(土)、学会・協会合同委員会を開催した。

●協会側より、単独でIDFに加盟したい意向が示され、討議が行われた。

①日本の所属するWestern Pacific Region(WPR)はIDFの中で最も活動が活発な地区である。学会員がWPR、さらにIDF本体での種々の領域で活動できる機会を増やすため、日本の存在感を高めることが重要である。

②学会と協会が独立に加盟することは、他のWPR諸国と同様に日本からの参加が複数団体となり、発言

力が高まることが期待される。IDF総会での議決権は、国ごとに最大票数が付与されるため、協会が独立加盟しても現在の投票数は変わらない。しかしIDFに納入する年会費は会員数によって決まり、現在は日本が納めている会費は国力と比較すると少額ではないかとの認識を持たれている。その意味からも、協会の単独加盟により日本の影響力が増すであろう。

③ただしIDFに対して両団体が違う意見を持つことは好ましくないため、IDFに意思表示をする際は、両団体で意見調整を行なう必要がある。

●これらをもとに、以下のように学会・協会合同委員会としての意見がまとめられた。

①日本から学会、協会の2団体が加盟して、発言力の向上を期す。

②加盟の形態としてはそれぞれ単独に加盟するが、本合同委員会が両団体の意見調整の場を提供し、日本としてIDFに対して行なう意思表示を一本化する必要がある。

6)選挙管理委員会

委員長 田嶋尚子

委員：柳澤克之、山田憲一、林 洋一、榊原文彦、中村直登、久保敬二、豊永哲至

例年同様、本委員会は郵便、eメール等を利用して委員会活動を進めていくこととし、従来の申し合わせ通り、理事会推薦の田嶋尚子委員を委員長とし、以下の事項を確認した。

(i)21年度会長選挙の手順について

前年度「会長選挙手順」を踏襲し、

- ・支部からの推薦締切日は平成20年11月13日(木)とする。
- ・推薦された方の意思確認は11月26日(水)までに事務局必着とする。
- ・理事長への報告は11月28日(金)までに行う。
- ・11月30日(日)の定例理事会で、最終候補者3名を決定する。
- ・候補者の所信のフォーマットは前年度と同様とし、平成21年1月8日(金)を締切日とする。

(ii)候補者の所信が提出され、平成20年2月1日に委員会を開催し、以降の進め方について協議検討した。

1. 会長選出手順およびこれまでの手順についてそれぞれ確認した。
2. 所信の確認
3名の候補者から提出された所信について印刷の字体や文字数などを検討し調節した。
3. 今後の手順について
所信の手直し終了後に、規則に則り従来の形で理事長への報告、会員への周知、学術評議員へ

の所信の送付等を行うことが確認された。

4. 学術評議員会での投票手順の確認について

①開票作業には、会長候補者のいない支部の委員と、候補者のいない支部の出席した学術評議員の中から委員長が指名した者、委員長を含めて合計 8 名であった。今回候補者のいない東北支部、中部支部、および中国・四国支部の学術評議員の中から、3 名に依頼することとした。

②昨年と同様に投票用紙配布直前に会場を閉鎖し、回収後開放する。このことは、学術評議員へ候補者の所信を送る際に記載する。

③誤字、姓・名片方の記載でも、候補者の特定が出来れば有効とする。

④最多得票者に決定する。同数の場合は学会入会年月の早い者とする。同時入会の場合は、生年月日の早い者とする。

⑤各候補者の得票数は公表する。

⑥迅速に開票作業を行うため、投票用紙を折り曲げて投票する場合は「横二つ折りまで」とすることを注意事項として通達する。

以上は、議場で予め公表する。

7)「糖尿病学の進歩」プログラム委員会

委員長 南條 輝志男

第 43 回「糖尿病学の進歩」に向けてのプログラム委員会が門脇 孝前委員長のもと、平成 20 年 5 月 12 日に開催され、第 42 回「糖尿病学の進歩」の開催報告を受けて種々検討を行い、Post Graduate を重視してプログラムを作成することなどを確認した。

また、第 44 回「糖尿病学の進歩」に向けてのプログラム委員会を平成 21 年 4 月 11 日に開催した。第 43 回の相澤世話人より、講演依頼時の文面に対象者を記載して明確にしたこと、担当セッションの全タイトルとその演者を一覧にして通知することにより、各セッションに一貫性を持たせるための工夫をしたことが紹介された。今後、若手向けの内容、開業医の先生方向けの内容についても充実させることなどを検討した。

8)内科系学会社会保険連合

委員：渥美義仁、春日雅人、加来浩平

平成 20 年度診療報酬改訂では内保連を通して、管理栄養士による食事指導の評価改善、非インスリン使用例での血糖自己測定、血糖コントロール不良例のグリコアルブミン測定制限緩和、などを要望し、一部の退院患者への栄養・食事指導の評価拡大、生活習慣病管理料での非インスリン使用者への血糖自己測定の新設、グリコアルブミン測定制限緩和、などで一定の成果を得ることができた。しかし、上記の要求項目も評

価は不十分であり、糖尿病の治療改善に貢献できたとは言いがたい。よって、平成 22 年度診療報酬改訂に向けて、前回の経緯を踏まえて糖尿病腎症予防の栄養食事指導管理料の新設、非インスリン使用者への SMBG を改善、などを中心に内科系社会保険連合会を通して厚生労働省に要望する予定である。糖尿病腎症予防の栄養食事指導管理料は、前回改訂で糖尿病合併症管理料として新設されたフットケアを、腎臓合併症に適応することを基本としている。非インスリンでの SMBG は食後血糖の評価の点からも、糖尿病の最大の指標である血糖値を知るという患者の視点からも改善を期したい。関連学会と連携協調しながら要望を整理して申請する予定である。

9)日本医学会に関する報告 評議員 門脇 孝

平成 21 年 2 月 25 日に第 76 回定例評議員会が開催された。日本レーザー医学会、日本臨床腫瘍学会の新規加盟が承認された。

第 28 回日本医学会総会は、平成 23 年 4 月 8 日～10 日、矢崎義雄会頭、小川秀興・開原成允・鈴木聡男各副会頭、永井良三準備委員長の下、「いのちと地球の未来をひらく医学・医療—理解・信頼そして発展—」をテーマに東京で開催される。

10)国際交流に関する報告 理事 田嶋尚子

平成 20 年 8 月 10 日および平成 21 年 2 月 20 日(金)に委員会を開催した。

① IDF 関連事項

糖尿病学会は、糖尿病協会からの要望により IDF へ単独加盟することとなった。今後活動の際には 2 団体が協議を尽くして相互の意見を調整すること、日本の代表権は従来通り 5 名で学会 3 名、協会 2 名とすることを確認した。平成 20 年 10 月両学会の理事長間で覚書が交わされ、IDF-WPR 事務局は申請書を受理した。1985 年に創刊された DRCP は IDF-WPR 機関紙から IDF 機関紙に変更になった。IDF の組織は、代表権者が会長から CEO へ、役員の人数縮小など、組織内に大幅な変更があった。IDF 定例理事会(平成 20 年 5 月、コペンハーゲン)、IDF-WPR 常任理事会(平成 21 年 3 月、台湾)第 1 回 Diabetes in Asia Study Group Conference(平成 20 年 10 月、カトマンズ)などに関連理事・委員が出席した。

②国際的な学会活動に関する事項

平成 21 年 2 月の臨時理事会で承認された AASD (the Asian Association for the Study of Diabetes)の事務局を日本糖尿病学会内に置き、日本糖尿病協会と共同で業務を行うこととした。第 1 回 AASD 年次集会を第 52 回年次集会の会期中に開催する。AASD の機

関紙として JDI (Journal of Diabetes Investigation) を発刊する準備が進行している。同臨時理事会では EASD との緊密な交流の推進が承認されたが、今後、共同 Work Shop、臨床研究、若手研究者の交流などを行う予定である。

③国際交流・教育活動に関する事項

World Diabetes Day のブルーライトアップを、日本では 2007～2011 年の 5 年間は継続して実施することを確認した。IDF 年次集会における展示活動である Global Village への出展につき、日本糖尿病学会としては英文出版物の PR などを行うことを確認した。APDEC 2008 が、平成 20 年 8 月 23～30 日に東京で開催された。会期中に第 1 回 IDF-WPR 糖尿病教育者会議が開かれた。次回コースは 2011 年(開催地未定)に行われる予定である。

④国際交流委員会部会の設置

本委員会の活動を効率的に行うため、以下の部会を設置することとした。IDF・AASD 部会：清野裕、JDI 部会：堀田饒、EASD 交流部会：田嶋尚子、ISPAD 部会 雨宮 伸、広報部会：谷澤幸生

⑤その他

World Atlas に掲載する日本の糖尿病有病率など疫学データの収集、小児糖尿病委員会と連携した小児・思春期糖尿病関連の国際的活動の推進、糖尿病学会事務局の就業時間と諸外国との時差を勘案した柔軟な対応に関する本委員会からの要望、などについて討議した。

11)学術調査研究・教育に関する報告

理事 南條輝志男

担当理事ならびに委員の交代があった。最大実施期間 4 年を超えた調査研究には終結と委員会報告の提出をお願いすることを再度確認した。新規の調査研究として、「日本を含めたアジア地域のメタボリックシンドロームの臨床像の把握およびその原因の解明」の申請があり、妥当であると判断し理事会にて承認された。

(1)糖尿病性神経障害の実態調査と国際比較調査研究委員会(開始：2003 年 5 月 13 日)

委員長 堀田 饒

委員：渥美義仁、岩本安彦、大野良之、佐々木秀行、中村二郎、馬場正之、安田 斎

「糖尿病における合併症の実態把握とその治療に関するデータベース構築による大規模前向き研究(JDCP Study)」がスタートされたのを受けて、JDCP Study 参加施設に対して登録症例の一部での詳細な神経機能検査を依頼することとなった。学術調査研究・教育委員会の勧告に従い、本委員会活動を一旦終了と

するが、JDCP Study の結果解析に際しては、各委員にご協力をいただく予定である。

(2)日本人におけるインスリン分泌とインスリン抵抗性に関する実態調査研究委員会

(開始：2004 年 7 月 19 日) 委員長 清野 裕

本委員会は日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態を調査し、それぞれを評価するための検査法や結果の解析法を確立するとともに、今後標準的な評価法を提唱するため設置された。すでに 18 名の委員が、それぞれの施設における調査経過の報告を終えた。2007 年 1 月にはシンポジウムを開催し、海外から本研究テーマに精通する研究者 2 名を招いて講演を依頼した。Prof. Michael Nauck は「The role of incretins for insulin secretion in healthy, prediabetic and type 2 diabetic subjects」、Prof. Wilfred Y. Fujimoto は「Lifestyle-Related Disorders in Japanese: Obesity, Type 2 Diabetes, and the Metabolic Syndrome」のタイトルで講演が行われた。海外の研究結果とわが国の研究結果を比較することで、日本人におけるインスリン分泌能とインスリン抵抗性に関する特徴についての検討もなされた。

定期的に会合を持ち各委員の意見や情報を聴取し活発に議論を重ねると共に、各施設から「グルコースクランプ」、「ミニマルモデル」、「グルカゴン負荷試験」、「経口糖負荷試験」、「体脂肪分布」、「アディポネクチン、プロインスリン、炎症関連因子」に関するデータを収集し、経口糖負荷試験では 20,000 例、グルコースクランプでは 700 例、ミニマルモデルでは 500 例、グルカゴン負荷試験では 1000 例を超えるデータを集積した。全国的なレベルで多数例の解析を行い、実態に沿った基準の提案を行うステップに入った。参加者から得られたデータを専門のシステムエンジニアとともにデータベース化し、多数例の集計成績を構築するとともに、客観的で精度の高い解析を行っている。北から南まで全国レベルで、多くの施設からのデータを多数例について集積して、日本人のインスリン分泌能とインスリン抵抗性の実態解明が可能となり、最終集計と提言を行う段階に入ったため、本年をもって終了する。

(3)糖尿病関連検査の標準化に関する調査検討委員会

Committee on the standardization of diabetes-related laboratory testing

(開始：2007 年 8 月 19 日) 委員長 柏木 厚典

委員：南條輝志男、春日雅人、稲垣暢也、中村二郎、伊藤博史、富永真琴、及川眞一、野田光彦、河村孝彦、三家登喜夫、難波光義、柱本 満、笹原誉之、武井泉(日本臨床検査医学会)、梅本雅夫(日本臨床化

学会), 村上正巳(日本臨床検査自動化学会), 桑 克彦(日本臨床検査標準協議会), 小栗孝志(日本臨床衛生検査技師会), 委員会事務局 西尾善彦

本委員会では以下の 3 点について重点的に討議を行った。

- 1) HbA_{1c} 国際標準化に関して
- 2) 血漿(血清)グリコアルブミン値の基準値に関して
- 3) 血漿インスリン濃度標準化の問題

これまでの検討内容と決定事項

- 1) 昨年度本委員会で検討された「HbA_{1c} 国際標準化に関するわが国の対応」について, 日本糖尿病学会としての正式な見解案をまとめ, 委員会報告として雑誌「糖尿病」に発表することになった。原案が柏木委員長より示され内容について検討された。その最終稿が理事会で承認されたのを受け現在雑誌「糖尿病」に投稿中である。
- 2) 日本赤十字社が献血者検査にグリコアルブミンを採用することになり, 日本糖尿病学会にその基準値, 受診勧奨値について意見を求められたことから, これらの値について検討された。現在の HbA_{1c} 値とグルコアルブミンの関連については血糖安定時の多検体を検討した報告として種々の関係式が発表されている事から, 正式な基準値が決定されるまでは, 現在の HbA_{1c}(%)の基準値, 受診勧奨値を 3 倍した値を参照することとして報告することになった。
- 3) 血漿インスリンの測定値について, 梅本委員会から ADA と IFCC による標準化の動きが紹介され, 既にインスリンの測定値の標準化について検討を開始されている三家委員に日本の糖尿病学会としての取り組みを検討していただくよう柏木委員長より要請がなされ今後本委員会で検討することとなった。

(4) 糖尿病運動療法・運動処方確立のための調査研究委員会

(開始: 2007 年 7 月 16 日) 委員長 佐藤祐造
本調査研究委員会を平成 20 年 6 月 16 日, 11 月 30 日, 平成 21 年 3 月 20 日の計 3 回開催した。20 年度の活動状況は下記の如くである。

無作為抽出した糖尿病専門医(以下, 専門医)および日本医師会紹介の専門医以外の内科医(内科医)各 600 名を対象に, 糖尿病運動療法の指導状況および治療効果に関するアンケート調査を郵送法にて実施し, 平成 21 年 1 月 31 日迄に返答の得られた専門医 275 名, 内科医 128 名の合計 403 名(回収率: 33.6%)を解析対象とした。

専門医の 64% が糖尿病専門外来を実施しており,

内科医の実施率(18%)と比べて有意に高かった。また, 専門医ではインスリン治療患者が平均で 37% と, 内科医(15%)より多かった。また, 食事療法は専門医の 78%, 内科医の 67% が初診患者のほぼ全員に指導していたが, 運動療法では専門医, 内科医とも約 4 割に過ぎなかった。一方, 運動処方箋作成や集団・個別指導などを行っていたのは, 専門医の約 6 割に対して内科医では約 3 割にとどまったが, 専門医でも運動指導専任スタッフがいるのは 2 割に達していなかった。

また, 運動療法指導にあたっての問題点(複数回答)として, 診療報酬に反映しない, 指導時間がない, 指導者がいないなどの点が指摘された。また, 専門医, 内科医の約 4 割が, 糖尿病患者用の適切な運動指導ガイドラインを切望していた。

本調査によって全国規模で糖尿病運動療法の実施状況や課題が明らかとなり, 専門医と内科医では実施状況に相違があることが示唆された。また, ガイドライン作成は他の要望と比べて現実的かつ効率的であることから, 糖尿病運動療法指導ガイドライン作成の必要性が確認された。

次年度以降は, 今年度の結果を踏まえた糖尿病患者へのアンケート調査や, 協力の得られる医療機関での糖尿病患者への運動療法指導を基に, 糖尿病運動療法指導ガイドラインの作成を行うことが予定されている。

(5) 1 型糖尿病に関する調査研究委員会

(開始: 2007 年 12 月 23 日) 共同委員長: 花房俊昭
共同委員長: 小林哲郎

1) 劇症および急性発症 1 型糖尿病分科会(分科会委員長: 花房俊昭)

劇症 1 型糖尿病の HLA genotype については 160 例以上の症例が集積され, 日本糖尿病学会, 米国糖尿病学会で中間報告を行う予定である。IA-2 抗体単独陽性 1 型糖尿病については論文投稿準備中である。インスリン注射を契機に 2 型糖尿病より 1 型糖尿病に移行した症例, 劇症 1 型糖尿病死亡例・心停止例, 2 型糖尿病合併劇症 1 型糖尿病例, インターフェロン投与後発症 1 型糖尿病例については「糖尿病」で募集したアンケートの回答に従って, 現在精査中である。

2) 緩徐進行 1 型糖尿病分科会(分科会委員長: 小林哲郎)

1. 委員会施設における糖尿病発症 5 年以内の多施設間前向き検討: これまでに 608 例を集積し, “2 型糖尿病”中に約 10% の腓島抗体(GAD 抗体 and/or IA-2 抗体 and/or IAA)陽性例を認めた。GAD 抗体陽性率は他の抗体と比べて有意に高頻度であった。今後さらに症例数を増やす

とともに、その自然経過の前向き観察を行っている。

2. 全国調査：現在まで 38 施設の登録を受けている。さらに登録を増やし緩徐進行 1 型糖尿病の実態を明らかにし、診断基準の作成に役立てたい。

3) 遺伝子解析チーム(チームリーダー：池上博司)

日本人 1 型糖尿病の体質を明らかにして、診断・予防・治療に資する情報を得ることを目的に、3 つのサブタイプ(急性発症典型例、劇症型、緩徐進行型)の疾患感受性遺伝子解析を網羅的に進めている。HLA 領域の候補遺伝子 SNP に関する解析結果は論文化して投稿中である。さらに密な SNP(900K)を用いたゲノムワイドのアソシエーションスタディ(GWAS)を進めて一次スクランを完了した(解析センター：東京大学人類遺伝学教室、徳永勝士教授)。HLA 領域にゲノムワイドの水準で有意に関連する SNP を各病型とも複数認めた。HLA 以外で関連が示唆される領域の SNP を選択し、二次スクランの準備を進めている。

12) 平成 21 年度坂口賞および学会賞に関する報告

- 1) 坂口賞は、伊藤千賀子氏、三木英司氏に授与する。

- 2) 学会賞審査委員会(委員長 清野 裕)を平成 21 年 1 月 12 日に開催し、各受賞者を選出した。

①平成 21 年度ハーゲドーン賞

小林哲郎(山梨大学医学部第三内科)

「Slowly progressive insulin-dependent (type 1) diabetes mellitus (SPIDDM：緩徐進行 1 型糖尿病)の診断、病態および進展阻止に関する研究」

②リリー賞

- i) 石原寿光(日本大学医学部内科学系糖尿病代謝内科学分野)

「2 型糖尿病発症における膵 β 細胞障害の分子機構」

- ii) 綿田裕孝(順天堂大学内科学・代謝内分泌学)

「膵 β 細胞容積調節機構に関する研究」

13) 学会認定事業に関する報告

- (1) 専門医試験委員会 委員長 清野 裕

委員会は小委員会も含め 8 回開催された。平成 20 年度の専門医試験は 325 名が受験し、271 名が合格した。研修指導医は 99 名(随時審査も含む)、認定教育施設は 29 施設(無床 1 施設含む)が認定された。更新は専門医 432 名・研修指導医 167 名・認定教育施設 98 施設であった。認定教育施設から常勤の研修指導医が移動してしまい資格停止になる施設がある。また認定教育施設不足のため専門医取得のための研修がで

きないことが問題となっている。常勤の専門医がいることを条件とした関連施設(仮称)の設置、研修指導医の資格条件となる会員歴を短縮、内科施設と連携することを条件とした連携教育施設「小児科」(仮称)の設置など、専門医認定制度規則の改定を行なっている。

(2) 専門医試験委員会

委員長 荒木栄一

平成 20 年 5 月 23 日、第 28 回試験委員会を開催し、第 19 回専門医試験の試験方法と出題問題の作成分担、口頭試験担当者、試験監督担当者を決めた。8 月 3 日に委員長、数名の委員により試験問題のチェックを行い、9 月 21 日に委員全員で試験問題の選定を行った。第 19 回専門医試験は、平成 20 年 10 月 19 日、東京国際フォーラムにおいて実施した。受験者には昨年同様事前に一部出題範囲・面接での評価について公表し、マークシート方式での実施となった。受験者は 325 名で、11 月 9 日に合否判定案を決定、11 月 23 日専門医認定委員会に報告、271 名の合格(合格率 83%)が承認された。今年度も希望のあった受験者に対し、成績の開示を行なった。

第 20 回(平成 21 年度)の試験は平成 21 年 10 月 25 日(日)、第 21 回(平成 22 年度)の試験は平成 22 年 10 月 24 日(日)東京国際フォーラムでの実施を予定している。

14) 分科会に関する報告

日本糖尿病合併症学会 齋藤 康

日本糖尿病学会の分科会である日本糖尿病合併症学会は、平成 20 年 10 月 3、4 日の 2 日間に亘って岩本安彦会長(東京女子医科大学糖尿病センター)の下、第 23 回日本糖尿病合併症学会年次学術集会を東京の日本都市センターにて開催した。

年次学術集会は、シンポジウム 6 題、そして一般演題は例年通り全てワーク・ショップ形式で行われた。市民公開講座も 10 月 5 日に開催された。本学会が設けた学会賞各賞の受賞者は以下の各先生で、Outstanding Foreign Investigator Award は Hans-Henrik Parving 先生(Department of Medical Endocrinology, National University Hospital, Copenhagen, Denmark)、Distinguished Investigator Award は松澤佑次先生(住友病院)、清野裕先生(関西電力病院)、Expert Investigator Award は榎野博史先生(岡山大学大学院 腎・免疫・内分泌代謝内科学)、Young Investigator Award は三五一憲先生(東京都神経障害科学総合研究所)、鈴間潔先生(長崎大学大学院・眼科視覚科学)、大須賀淳一先生(東京大学医学部附属病院・糖尿病代謝内科)、山本靖彦先生(金沢大学大学院・血管分子生物学)に贈呈され、受賞講演が行われた。

平成 21 年に予定されている第 24 回日本糖尿病合併症学会は、榎野博史会長(岡山大学大学院 腎・免疫・内分泌代謝内科学)の下、10 月 9、10 日の 2 日間に亘って岡山コンベンションセンターを会場として開催されることが決定している。学会の機関誌「糖尿病合併症」は抄録号を含め 3 回発行された。

15) 糖尿病総合対策への取り組みに関する報告

理事長 門脇 孝

2008 年 9 月 29 日に開催された日本糖尿病対策推進会議の第 9 回幹事会において、本学会の理事会務の変更に伴い、門脇理事長を副会長に、岩本常務理事を幹事に推薦し、承認された。また、前副会長の春日理事が同会議の幹事として推薦され、留任することとなった。

(1)「対糖尿病戦略 5 年計画」作成委員会

委員長 岩本安彦

委員：岩本安彦*、渥美義仁、荒木栄一、稲垣暢也*、植木浩二郎*、佐倉 宏、谷澤幸生、野田光彦、花房俊昭*、羽田勝計

委員会開催：平成 20 年 8 月 24 日(日)、10 月 11 日(土)

理事長指名の岩本委員が委員長となり、前委員会から継続した委員 6 名と新委員 4 名(*)とで委員会を構成し、2 回の委員会を開催した。

第 1 回委員会では、第 1 次委員会の活動について、第 1 次委員会の議事録と平成 16 年 8 月報告の「対糖尿病戦略 5 年計画-糖尿病研究の推進と予防・診断・治療環境の向上-」などに基づいて報告を行った。さらに、門脇理事長が作成・発表した「新健康フロンティアにおける糖尿病対策-研究開発・提供体制・具体的施策・戦略目標-」(平成 19 年 2 月)をもとに第 2 次 5 年計画を作成するとの方向性を確認した。

第 2 回委員会では、第 2 次 5 年計画について改訂作業を進めた。平成 20 年 11 月の定例理事会において、第 2 次 5 年計画の中間報告を行った。

平成 21 年 5 月開催の定例理事会で第 2 次 5 年計画(案)の承認を受けるよう委員会で検討を進めている。定例理事会で承認後、評議員会に報告する予定である。

(2)「健康日本 21」の糖尿病対策検討委員会

委員長 伊藤千賀子

I. 委員会開催：平成 20 年 12 月 7 日(通算 14 回)に開催。その他委員会を開催しないで e-mail で討議した。日本糖尿病対策推進会議の幹事会の意向を受けて検討する機会が多い。日本糖尿

病対策推進会議の評価のアンケートでも内容を一部変更した糖尿病学会の専門医向けを作成した。

II. 日本糖尿病対策推進会議の活動(2008-4-1~2009-3-31)

幹事会は 2008-9-29(通算 9 回)に開催。糖尿病神経障害・網膜症・腎症のポスターを作成。足のチェックシートの解析結果の報告が行われた。また、日本糖尿病対策推進会議の評価アンケートの一部が報告された。アンケート調査の対象は各都道府県医師会の医師会員 100 人ずつで 4,700 人、日本糖尿病学会の専門医 730 人とした。回答率は日本医師会会員が 2,084 人で 44.5%、糖尿病学会会員は 486 人で 64% と学会員が 20% 高かった。勤務医の比率は 36.1% および 63.9%、日本糖尿病対策推進会議の認知度は 36.8% および 89.7%、「治療エッセンス」の認知度は 36.1% および 85.7%、「治療エッセンス」を持っている人は 30.1% および 77.1% で何れも学会員が約 2.5 倍高かった。「治療エッセンス」の活用率は医師会員全体では「治療エッセンス」を持っている人の 52.4%、内科に限定すると 61.8% であった。糖尿病学会員では 45.7% と低くなっていたが、これは専門医の場合「糖尿病治療ガイド」など専門的な本を活用するためと思われる。この結果から日本医師会員が日本糖尿病対策推進会議について十分理解されていないので、更にこの事業の啓発活動を行う必要があると思われる。

III. 今後の本委員会の活動方針

1)「治療のエッセンス 2007」の改訂、2)日本糖尿病対策推進会議の評価に関するアンケートの詳細な解析と論文作成、3)若年 2 型糖尿病の初診時に網膜症(硝子体出血)などの合併症頻度が多いので、小学・中学・高校時代の糖尿病 screening や糖尿病治療等について、学校の保健室などに注意を喚起するポスターを作製することが決められたが、これらの実施に当たっては日本医師会と十分協議する必要がある。

(3) 糖尿病データベースの構築委員会

委員長 小林 正

本研究は糖尿病患者のデータベースを構築するために、日本糖尿病学会、日本腎臓学会、日本糖尿病眼学会、日本歯周病学会の専門家がこれからの大規模前向きのコホート研究にもモデルとなるよう標準的で必要にして十分な、しかも出来るだけ容易に報告可能な追跡臨床項目を決定し、総力をあげてプロトコルを構築し、このプロトコルにより糖尿病の実態を把握し、また治療のあり方に十分な資料となるデータの収集を行なうことを主眼としている。対象は、大学病院、基幹病院、診療所などで治療を受けている 40 歳

以上 75 歳までの糖尿病患者で、各合併症にエンドポイントを設定し、5 年間データを収集する。網膜症は、眼科専門医の所見、眼底 4 方向の写真なども含み、国際的にも通用するデータの収集を行なう。全国の種々の施設における異なった治療法により、どのように腎症、網膜症、神経障害という細小血管障害から心血管障害、脳血管障害などの大血管障害にいたる合併症を抑制しているか、またこれらの患者の長期の追跡により糖尿病患者の死因調査も施行し、現在の日本における糖尿病の実態を明らかにすることは糖尿病の管理・治療のあり方を考えるに際し重要である。この研究を遂行することにより適切な治療法のガイドラインの基礎となるデータや糖尿病治療の医療費のあり方に関する基礎的資料が得られる。

各学会の指導医などに行った試験事前アンケートでは、12,000 例の登録が可能と判明し、糖尿病学会の倫理委員会にて審議し、さらに研究者の属する大学などの倫理委員会にての審議のうえ、平成 19 年 6 月から調査研究を開始している。

平成 20 年 10 月 20 日現在の進捗状況は、登録数 7,518 症例、1 年目報告数 4,962 症例、また実施施設はアンケート調査では 675 施設からの回答を得ているが、現在のところ 485 施設である。ニュースレターやリマインドのよる研究参加者への働きかけにも関わらず、目標の 1 万症例には達することは出来なかったが、全委員の先生からの意見及び本研究の医学統計家である吉池信夫先生から、この時点で 1 万症例の達成を待つよりも、この辺りで登録を締め切って確実にフォローしていくことに重点を置くということに一致した。その後、1 年目報告件数は平成 21 年 4 月 8 日現在で 5,800 症例、参加施設 494 となり、徐々に上昇している。この 1 年目報告件数を出来るうところまで回収することに全力を挙げて取り組んでいるところである。

今年は、現在回収した症例の対象患者についての基礎的なデータをまとめ、これを公表することになっているが、他のコホート研究に比べ、5,100 症例の血糖、血圧、脂質の平均値ではともに良好な値が得られており、専門医を中心とする学会員の医療の質を示しているものと考えられる。学会員の本研究に対する更なるご協力をお願いしたい。

16) 各種委員会

(1) 糖尿病治療ガイド編集委員会

委員長 岩本安彦

委員：荒木栄一、岩本安彦、柏木厚典、門脇 孝、貴田岡正史、田嶋尚子、南條輝志男、今村 聡(日医)

委員会開催 1 回：平成 20 年 5 月 24 日(於：東京)

1. 発行部数と売上状況

「糖尿病治療ガイド 2008-2009」

平成 20 年 4 月 第 3 刷り発行 30,000 部

平成 21 年 1 月 第 4 刷り発行 10,000 部(累計発行部数 150,000 部)

第 4 刷り増刷に際して、インスリンの商品名変更に伴う小改訂などを行った。

平成 20 年 4 月～平成 21 年 3 月末の売上 38,334 部(累計売上部数 144,697 部)

2. 編集委員会の改組を行い、糖尿病治療ガイド 2010-2011 の発行に向けた作業を進める予定。

(2) インターネット委員会 委員長 田嶋尚子

本委員会は、平成 20 年 5 月 23 日(東京)および平成 21 年 2 月 21 日(松本市)にて開催された。継続審議事項や、学会ホームページへのリンク依頼および広告掲載の許可等については、イ委員会委員メーリングリストを利用して常時、全委員参加のもとに検討している。

① ホームページについて

支部ホームページの活性化を図るため、1 支部あたり年間 10 万円の予算を当てて業者にも作業を依頼することとした。英文ホームページには、国際交流の情報、英文ジャーナルや英語で行われるシンポジウムの案内等の情報を効率的に収集し掲載することを確認した。今後、谷澤委員を中心に若手のメンバーを入れて活性化する。

② オンラインジャーナル

学会誌「糖尿病」は、これまで医学書院に委託して UMIN のサーバーに掲載していたが、平成 17 年、18 年分は J-STAGE でのオンラインも併用してきた。J-STAGE は文献検索など便利な点もあるが、UMIN の使用停止による不都合がないかについても検討し、反対意見がなかったため、今後は J-STAGE のみとすることとした。学会誌「糖尿病」は Vol. 52, No3 まで掲載した(平成 21 年 4 月 13 日現在)。

③ その他

医療情報学会シンポジウム(平成 20 年 11 月開催)における糖尿病診療の IT 化の現状に関する報告うけ(古賀委員)、インターネット委員会での本件の取り組みについて討議を開始した。

医学書院「糖尿病ハンドブック第 2 版」に関する訴訟の経緯を、学会ホームページに掲載することが平成 20 年 5 月の定例理事会で決定した。委員会で検討の結果、掲載期間は 2 カ月、内容はタイトルと簡単な文章を掲載し、全文は PDF で開けるようにすることにした。

インターネット委員会の委員には任期がないので、

次回委員会で内規の見直しをし、秋の理事会で承認を得ることとした。

(3) 糖尿病性腎症合同委員会 世話人 羽田勝計

平成 20 年度には 2 回の委員会(第 27 回: 5 月 24 日, 東京国際フォーラム, 第 28 回: 12 月 7 日, 霞ヶ関ビル)を開催し, 日本糖尿病学会・日本腎臓学会の委員および日本透析医学会からのオブザーバーが出席して, 以下の議題について討議を行った。

1. JDCP study および DNETT-Japan の進行状況
2. 糖尿病性腎症の病期分類の改訂について: ワーキンググループにて検討を開始することとした。
3. 糖尿病性腎症の食事療法の基準について: 「CKD 診療ガイド」と「糖尿病治療ガイド」の記載の整合性を検討することとした。
4. 透析患者における血糖コントロールの評価について: GA の有用性を, 「CKD 診療ガイド」, 「糖尿病治療ガイド」に記載するか否かを検討する。
5. 大血管障害のリスクファクターとしてのアルブミン尿について(継続審議)
6. 日本慢性腎臓病対策協議会の現状報告

(4) 移植関係学会合同委員会臓器移植中央調整委員会・臓器移植関連学会協議会報告

委員長 谷口 洋

(1) 平成 20 年度移植関係学会合同委員会臓器移植中央調整委員会が平成 20 年 9 月 19 日と平成 21 年 2 月 27 日に開催され, ①臓器移植施設として新規に藤田保健衛生大学, 香川大学が移植関係学会合同委員会の認定に廻されることになった。また, ②平成 21 年 2 月 5 日現在の臓器移植希望者申請書類受付は 345 件(そのうち臓器同時移植は 300 件, 臓器単独症例は 45 件), ③2 月 23 日現在のネットワーク登録は 157 件(そのうち臓器同時移植は 129 件, 臓器単独移植は 28 件), 移植手術済み 59 件(そのうち脳死ドナーから 57 件, 心停止ドナーから 2 件), 生体臓器移植 3 件, 待機中死亡 22 件, 取消し 15 件であることが報告された。

(2) 第 11 回臓器移植関連学会協議会が平成 21 年 3 月 14 日に開催され, 現行法では 15 歳未満の小児の場合は臓器の提供が不可能なため余儀なくされている渡航移植に対する国際的批判を踏まえ, 平成 9 年制定の現行の「臓器の移植に関する法律(臓器移植法)」に対し, 本人が臓器提供の拒否の意思を表示していない場合は, 年齢にかかわらず, 遺族の書面の承諾により死体(脳

死体を含む)からの臓器提供を可能とする早急な法改正を要望する書面を国会議員に送付することを決定した。

(5) 糖尿病学用語集編集委員会 委員長 石塚達夫
委員会は平成 20 年 5 月 23 日(金), 10 月 18 日(土), 平成 21 年 3 月 8 日(日)の 3 回開催した。

1. 日本医学会用語管理委員会から「医学用語辞典第 3 版」の糖尿病関係の用語に関して依頼があった。即ち米国医学図書館の MeSH 分類によって配列された階層構造の妥当性のチェック, 階層構造に配列された用語と本学会用語集との整合性のチェックそして未配列用語の階層構造への組み入れなどについて検討した。MeSH 分類では「糖尿病」と「糖尿病合併症」が別の疾患に分けられている点, 1 型糖尿病の同義語として, ブリットル糖尿病やインスリン依存性糖尿病, 若年型糖尿病を挙げ, また 2 型糖尿病の同義語としてインスリン非依存性糖尿病を挙げている点, 脂肪萎縮性糖尿病を 2 型糖尿病の下位に分類している点などの問題点に加えて, 合併症の分類についても, 糖尿病性血管障害の下位に糖尿病性足病変があって糖尿病性腎症がない点など問題点の指摘があり, 今後, 日本医学会用語管理委員会で議論していく予定である。
2. 評議員からの意見・要望を検討し, 削除すべき用語, 新たに収載すべき用語や略語, 解説を付すべき用語と解説者などについての検討を進めている。削除すべき用語については, 現時点で 200 語程度を選定している。追加すべき用語については, 本学会編集の「糖尿病専門医研修ガイドブック 改訂第 3 版」など, いくつかの書籍や雑誌の索引項目を参考にして, 各委員で分担して候補の拾い出し作業を行い, 1143 の用語を拾い出した。それをもとに, 追加すべき用語や略語, 解説を付すべき用語と解説者などについて検討を行っている。また, インスリン製剤や大規模臨床試験については, 現在収載されている用語や解説も含めて, 後日, まとめて検討することとした。糖尿病学用語集第 3 版の発行にむけては更なる検討が必要である。

(6) 専門医取得のための研修ガイドブック作成委員会 委員長 岡 芳知

2008 年 8 月 29 日に編集会議を開催し, 新しい薬剤の記載も含めた大きな改定が必要との結論になり, 具体的な改定箇所とその内容, また依頼する執筆者について討議した。これにもとづき, 委員長が具体的な執

筆依頼文を作成し、計 39 名に原稿を依頼した。2009 年度の糖尿病学会前の発行を目指している。

(7) 倫理委員会 委員長 谷澤幸生

1 型糖尿病調査研究委員会小林哲郎委員長より提出された「緩徐進行性 1 型糖尿病に関する調査研究」の実施計画ならびに関連書類に関して岩本安彦前委員長のもと持ち回りで審議を行った。

本委員会は、谷澤幸生理事を委員長とし、田嶋尚子、稲垣暢也、小泉順二、西理宏、大澤春彦、山田雅康(顧問弁護士)を委員として再構成された。また、外部委員として赤林 朗東大大学院医療倫理学教授に必要に応じ依頼する。

(8) 科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン策定委員会 委員長 田嶋尚子

本年度は、全体委員会は開催していない。

「科学的根拠に基づく糖尿病診療ガイドライン」改訂第 3 版の刊行(平成 22 年 3 月予定)に向けて作業が進行中である。平成 20 年 2 月、執筆依頼ならびに査読委員就任に関する依頼状を配布し、全員から承諾の返事を頂戴した。平成 20 年 4 月 14 日に改訂第 3 版の委員会を開催し、改訂の基本方針、文献の検索法、エビデンスレベルとグレードの付け方、今後のスケジュール等について確認した。平成 21 年 3 月 5 日を最終として、23 名の執筆者の全員から原稿を頂戴した。

平成 20 年 12 月から査読委員による査読を開始し、「5. 血糖降下薬による治療」(5/16 開催予定)、「11. 糖尿病と歯周病」(開催日調整中)、「13. 糖尿病に合併した肥満」(3/26 開催済み)、「16. 糖尿病合併妊娠と妊娠糖尿病」(4/9 開催済み)「17. 小児思春期糖尿病」(4/8 開催済み)、「19. 糖尿病における急性代謝失調」(4/5 開催済み)の章については査読委員会を開催することとした。

進捗状況は順調で、平成 21 年 4 月 13 日現在、査読会開催ならびに査読コメントに基づく改訂の依頼の段階であり、5~6 月にはそれら改訂原稿がすべて揃う予定である。その後 6~7 月には全原稿を委員会全員にご確認いただき、10~11 月に校閲、平成 22 年 2 月には最終確認をし、印刷、製本をへて同年 3 月刊行の予定である。

また、初版と同様に、糖尿病専門医、一般医、コメディカルを対象に、改訂第 2 版の評価に関するアンケート調査を計画している。

(9) 将来計画委員会 委員長 羽田勝計

平成 20 年度に新たに発足した委員会で、荒木栄一、稲垣暢也、谷澤幸生、中村二郎、羽田勝計、伊藤博史

(事務局)の委員(敬称略)で構成され、門協理事長、植木幹事にもご出席願っている。これまで、平成 20 年 8 月 3 日(東京)、11 月 2 日(札幌)、同 21 年 2 月 7 日(東京)の 3 回開催した。本委員会は、日本糖尿病学会の将来計画として、①対策推進会議等の社会的活動、②アジアの一員としての活動、③次世代を担う人材養成、④理事会活動の会員への広報、開かれた学会運営、支部活動、学術集会のあり方、⑤糖尿病研究発展のための国への支援の働きかけ、などに関して検討を加え、理事会に提言を行うことを目的としている。

平成 20 年度には以下の点に関し、理事会への提言を行った。

1. 年次学術集会運営委員会の設置
2. 年次学術集会における学生・初期研修医参加費の無料化とそれに伴う一般参加費の値上げ
3. 年次学術集会におけるアジアセッションの充実とそのための予算化
4. 糖尿病学の進歩における学生・初期研修医の参加促進・無料化、とそのための予算化
5. メールを用いた情報発信(メールマガジン：仮称)

(10) パブリックリレーションズ委員会

委員長 加来浩平

委員：渥美義仁、植木浩二郎、小田原雅人、春日雅人、河盛隆造、田嶋尚子、寺内康夫、戸辺一之、濱野久美子、松田昌文、吉岡成人(50 音順)

本委員会は平成 20 年度に発足し、活動を開始した。第一回委員会を平成 20 年 8 月 11 日、第二回委員会を平成 21 年 2 月 11 日に開催し、本委員会の果たすべき役割と課題について議論がなされた。(1)糖尿病に関する学術情報、研究・調査の成果、国内外で蓄積されたエビデンスなどを社会に公開し、学会の公益性を高めるとともに、国民の健康増進に寄与する、(2)糖尿病に関する知識の啓発活動を行うことなどが本委員会活動の基本にあること、またその活動推進のためには、社会連携と広報のおおまかに 2 つの機能を持つ必要がある点が確認された。

今後の委員会活動におけるポイントとして、①広報活動の進め方、②社会のニーズをどのように吸い上げてゆくか、③所轄官庁などへのアプローチの進め方、④社会への積極的な情報発信、啓発活動、キャンペーンなどの策定などが挙げられた。また理事会・評議員会・他の学会内委員会との連携のもとに、必要な活動の速やかな実現を目指していくことが重要との認識で一致した。活動の実効性を高めるため、委員会内に少人数からなるワーキンググループを設置し、包括的かつ具体的な検討を進めてゆくことで合意を得た。今

後、ワーキンググループからの提案を基に委員会活動を継続してゆく。

(11) 年次学術集会運営委員会

委員長 南條輝志男

将来計画委員会において設置が提案され、平成 20 年度に発足した。

本委員会は、日本糖尿病学会の年次学術集会において、その準備作業等の一連の活動が円滑に行われ、且つ学会としての統一性・継続性をもって年次学術集会が開催されることを目的とする。但し、各会長の自主性を尊重し、独自の試みに対し制限を加えるものではない。(委員会規定第 2 条)

委員は、学術調査研究・教育担当の全理事および将来計画委員会の委員若干名ならびに前会長、会長、次会長、次々会長で構成される。(委員会規定第 3 条より要約)

平成 21 年 4 月 11 日に第一回委員会、5 月 22 日に第二回委員会を開催する。

4. 「糖尿病学の進歩」開催について

第 45 回「糖尿病学の進歩」

会 期 平成 23 年 2 月 18 日(金)・19 日(土)(予定)

会 場 福岡国際会議場(福岡市)

世話人 山田研太郎(久留米大学医学部内分泌代謝内科)

5. 平成 20 年度再補正予算並びに平成 20 年度収支決算に関する件(羽田理事)

総会で審議の上、平成 20 年度再補正予算並びに 20 年度収支決算書が承認可決された。(本号 p613～p641)。

6. 平成 21 年度補正予算並びに平成 22 年度事業計画および収支予算に関する件(河盛理事・羽田理事)

総会で審議の上、平成 21 年度補正予算並びに平成 22 年度事業計画および収支予算が承認可決された。(本号 p642～p656)。

7. 名誉会員の推薦に関する件

理事会が推薦した伊藤千賀子氏、吉川隆一氏の 2 名が名誉会員に承認された。

8. 学術評議員の承認に関する件

本年度は該当者がなかった。

9. 次々会長(第 55 回学術集会)の選任に関する件

学術評議員会にて投票により第 55 回会長に渥美義仁学術評議員が選出され、総会において承認された。

10. 第 53 回年次学術集会に関する件

平成 22 年 5 月 27・28・29 日の 3 日間、岡山コンベンションセンターおよび周辺施設(岡山市)において開催の予定である。

11. 編集委員、専門医認定委員会・専門医試験委員会委員の交代に関する件

任期満了に伴い各委員会の委員が交代することとなった。

「糖尿病」編集委員会 2009 年度選出委員(2009 年度～2012 年度)

北海道支部	吉岡 成人	北海道大学大学院医学研究科
東北	松井 淳	弘前大学医学部 内分泌・代謝・感染症内科
関東甲信越	石原 寿光 小山 一憲 佐藤 麻子	日本大学医学部 糖尿病・代謝内科学分野 国際医療福祉大学三田病院 内科 東京女子医科大学糖尿病センター
中部	戸邊 一之	富山大学医学部 第一内科
近畿	小川 渉 今川 彰久	神戸大学大学院医学系研究科 大阪大学大学院医学系研究科 内分泌・代謝内科学
中国四国	和田 淳	岡山大学病院 腎臓・糖尿病内科
九州	岸川 秀樹	熊本大学保健センター

「食品交換表」編集委員会 2009 年度選出委員(2009 年度～2012 年度)

東北	高橋 和真	岩手医科大学 糖尿病代謝内科
関東甲信越	弘世 貴久	順天堂大学医学部 内科学・代謝内分泌学
近畿	福井 道明	京都府立医科大学大学院医学研究科
九州	竹田 晴生	宇賀岳病院糖尿病センター

「治療の手びき」編集委員会 2009 年度選出委員(2009 年度～2012 年度)

北海道支部	関口 雅友	札幌厚生病院 第一内科
東北	間中 英夫	山形県立中央病院 内科

関東甲信越	植木 彬夫	東京医大八王子医療センター 内科
近畿	藤本 新平	京都大学医学部附属病院 糖尿病・栄養内科
九州	岩瀬 正典	九州大学大学院病態機能内科学

専門医認定委員会 2009 年度選出委員 (2009 年度～2012 年度)

北海道支部	黒田 義彦	滝川市立病院 内科
東北	山田祐一郎	秋田大学医学部 内科学講座
関東甲信越	杉原 茂孝	東京女子医科大学東医療センター小児科
	宇都宮一典	東京慈恵会医科大学 糖尿病・代謝・内分泌内科
	岡本真由美	日本大学医学部 内科学系糖尿病代謝内科学分野
中部	森田 浩之	岐阜大学大学院医学系研究科
近畿	細井 雅之	大阪市立総合医療センター代謝内分泌内科
	松久 宗英	大阪大学大学院医学系研究科内分泌・代謝内科
中国四国	柱本 満	川崎医科大学 糖尿病・内分泌内科
九州	田尻 祐司	久留米大学医学部内科学講座内分泌代謝内科

専門医試験委員会 2009 年度選出委員 (2009 年度～2012 年度)

北海道支部	関口 雅友	札幌厚生病院 第一内科
東北	間中 英夫	山形県立中央病院 内科
関東甲信越	栗田 卓也	埼玉医科大学 内分泌・糖尿病内科
	大野 敦	東京医科大学八王子医療センター
	佐々木 敬	東京慈恵会医科大学附属柏病院
中部	笈田 耕治	福井中央クリニック
近畿	黒瀬 健	関西電力病院 糖尿病・栄養内科
	古田 浩人	和歌山県立医科大学 第一内科
中国四国	大澤 春彦	愛媛大学大学院医学系研究科分子遺伝制御内科
九州	久富 昭孝	佐賀大学医学部 内科

12. 平成 21 年度選挙管理委員会委員の承認について

細則第 38 条により、下記のように承認された。

北海道支部	柳澤 克之	市立札幌病院内分泌代謝内科
東北	高橋 和真	岩手医科大学糖尿病代謝内科
関東甲信越	山田 信博	筑波大学大学院人間総合科学研究科
中部	榊原 文彦	住吉町クリニック 内科
近畿	三家登喜夫	和歌山県立医科大学付属病院
中国四国	江草 玄士	江草玄士クリニック
九州	豊永 哲至	国立病院機構熊本医療センター内分泌・代謝内科
会長経験者	春日 雅人	国立国際医療センター研究所

13. 「糖尿病学の進歩」プログラム委員会について

細則第 42 条により、下記のように承認された。

第 43 回「糖尿病学の進歩」世話人	相澤 徹
第 44 回「糖尿病学の進歩」世話人	三家登喜夫
第 52 回会長	柏木 厚典
第 53 回会長	加来 浩平
学術担当常務理事	南條輝志男

14. 学会後援について

申込みがあった 5 件全部を後援することとした。

- 2009 年度全腎協全国大会 in 愛知
平成 21 年 5 月 23 日・24 日
- 「メタボリックシンドローム撲滅運動キャンペーン」
平成 21 年 4 月 1 日～平成 22 年 3 月 31 日
- 第 9 回日本先進糖尿病治療研究会
平成 21 年 12 月 5 日
- ヘモグロビンエーワンシー (HbA1c) 認知向上運動～糖尿病の予防と治療を目指して～
平成 21 年 7 月 11 日
- 第 7 回 1 型糖尿病研究会
平成 21 年 11 月 7・8 日

15. 細則第 40 条の変更にに関する件

下記のように変更することとした。

現行細則	改定案
第 9 章 会長および年次学術集会	
第 40 条 この法人は年次学術集会を会長主宰のもとに毎年 1 回開催する。	第 40 条 現行通り <u>②理事会は年次学術集会運</u>

②年次学術集会の開催地、期日および日数は学術評議員会の承認を得る。	営委員会を設置し、年次学術集会が円滑に行われるよう会長に助言を与える。 <u>③運営委員会は理事若干名ならびに前会長、会長、次会長、次々会長で構成する。</u> 現行②を④とし以下順次繰り下げる ※下線部を追加する。
--	--

16. The Asian Association for the Study of Diabetes に加盟する件

The Asian Association for the Study of Diabetes (AASD) に加盟することが承認された。

17. 英文ジャーナルに関する件

理事会において、英文誌発刊準備状況が報告され、早期発刊に向けて準備を行なうことが承認された。

18. 専門医制度規則改訂の件

専門医認定委員会が作成した専門医制度規則改訂(案)が理事会での修正後、学術評議員会で承認された(注：改訂した専門医制度規則は糖尿病 52 巻 5 号より掲載済み)。

19. 会費 2 年以上滞納者に関する件

定款第 11 条第 3 号により会費 2 年以上滞納者 91 名の除名を決議した。

以上 文責 庶務担当常務理事 河盛隆造